

てそれより高いもの低いものの両群を選んだ。なお性別及びIQの高低別から見た両群のC、A、IQの平均は、表のようにおのおの群の間に男女の智能の場合をのぞいては、大きい違いはない。

1 性別による比較の結果、有意差を示したもののみについてみると、一年間を通じては、植物、人物、乗物に比較的多くの月に違いがみられ、男子に比べて女子に植物、人物が多く、乗物ではすべて男子が多い。これは、一般に考えられるような傾向がみとめられた。ほかに建物では九月に、事物では六月に各々女子が多く、その他というカテゴリーでは、九月、一二月、一月にすべて男子が多い。

これを項目別にみると、自然、動物、不明に差がみられた。なお五月ほどの項目にも全く差がみられなかった。これは、五月には行事が多く同一環境の場が多かったことに関係があるのではないかと思われる。一年間の全体の平均を見ても、やはり植物、人物、乗物に、先にふれたような男女差がみられた。

2 智能の高低による比較の結果、有意差があるか検定したところ、智能の高いものが植物を七月に多くかき、智能の低いものは、人物を七月、動物を六月、不明を四月五月六月に多くかいている。

これによると、各月を通じて智能の高低に著しい差を示すものはごくわずかである。一年間総合的にみて、全く有意差はない。有意差は一学期にのみみられ、二学期以後は全くみられないのはおもしろい傾向だと思ふ。これはもつとよくしらべてみたいと思ふ。

3 行動特性について、有意差のあるものを見るため、三〇の行動特性のうち、今回は、攻撃性、快活性、活動性、社会性、情緒反応、独創性、計画性、被暗示性、興味の持続性の九特性について検討した。各内容を各項目ごとに、一年間にかかれた数を総数で除して一〇〇倍したものを各自の各項目の得点とし、この得点の差

によって、各特性の高群と、低群を比較した。九項目のうち、四項目に差がみられた。有意な差を示したものは、次の通りである。社会性では人物、動物、その他に、被暗示性興味の持続性、計画性では各々不明に有意差がみられた。即ち、社会性のある子ども（他の子どもとかグループに向けられる）は、動物とか特定の分類に入らない、其の他のものが著しく多く、社会性にかけている子ども（興味が自己に向けられる個人的な子ども）は人物が多い。また暗示にかかりやすい、興味の持続出来ない、計画性のないこのような子どもは不明のえが多かった。次に有意差はなかったが、独創的な子どもは動物、その他が多く、活動的な子どもも其の他が多くみられた。上述のように、描画内容に若干の差異がみられた。とくに今回は性別、行動特性に有意差がみられるようである。この結果は人数も少なく、反省すべき点多いと思われる。更に今後、色彩、スペース、運動などの面についても分析してゆきたいと思っている。

(大会発表論文抄録15—18頁)

幼児の中断行動における反応

大阪樟蔭女子大学児童研究所

大西憲明・津田典子

永瀬保子・高岡漢子

目的 製作の場合、自由でのびのびとした雰囲気まで誘導されれば、幼児は容易に自己表現を試み、自主的に活動し、自分から問題を発見し、さらによりよい解決や構成の工夫を企てること予想される。だが、こういう場面に導く保育者の適切な助言や指導のありかたには、理論的には種々の要因や技術が考えられ、既に多くの

現場においても、その実践化が着々と示されている。しかし、指導の場が、保育者・幼児という人間関係において行なわれるかぎり、いかに誘導がたくみであっても、保育者というおとなの、幼児に及ぼす社会心理的圧力は見逃がすわけにはいかない。そこで、作業を中断することが、幼児に対してどのような反応を及ぼすかを、実験的に検討しようとした。これは、基本的には、目的遂行への意図があるかぎり、その当面の着手された作業が中断されても、再びその中断された作業に復帰して再行する傾向があるという仮説に基き、その再行に対する保育者の存在の効果を明らかにしようとしたものにはすぎない。

方法 実験事態を、再行の際に保育者が傍にいるというA事態と、幼児を独り残しておくというB事態との二種にして、successの程度に分けた。中断される原作業は積木を主として用い、実験(1)では、積木をやらせ、これを中断して玉通しをやらせ、これを終了した後原作業に復帰する割合を、A・B両事態で比較した。この結果ではA事態がB事態よりも少なく、保育者が傍におれば、中断された作業を再びやろうとするよりも、保育者の次の指示を待つものが

多かった。実験(2)で作業を変えても同様なことが起った。実験(3)では、中断させる仕方によって再行反応がどう変化するかを見たが、五種の条件下、ともにA事態での再行は少なく、特に保育者の禁止力が強く再行を抑制していた。実験(4)では、作業への要求水準の上昇を保育者の圧力が抑圧すると仮定して、これをA・B両事態で比較したが、やはり保育者の傍にいる事態では、上昇率が、保育者のいない事態よりも少なかった。このような保育者の及ぼす圧力に対して過敏に反応するかどうかは、幼児自身の人格条件にもよると思われたので、これを精薄幼児について試みた。結果は、自己の能力を保育者から評価されるという感受性が強いものほど、中断された作業に復帰して再行することが少ないようであった。

結語と考察 製作活動の場は、保育者が幼児を作業に着手させ、その後は自由にさせておくと、最初にかねらぎ意図した目的意識によって、積極的に自ら製作活動を発展すると仮設できよう。

(大会発表論文抄録67-68頁)

IV 運動・健康管理・食物教育に関する研究

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

三才児の運動あそびの

発達に対する一考察

東京都保育研究会共同研究グループ

秋田 美子・浅野 信子

佐藤 玉枝

三才児に与える運動遊びの基礎的な資料として先ず三才児が自由に、自発的に喜んで行なっている運動あそびを忠実に記録してみることから出発して、その運動あそびの中で体のどんな部分を使っているか、またその興味の中心点がどこにあるか、さらにそれらのあそびは遊具とどのような関係をもつかということを分析してみた。

目的 三才児の運動発達を促進させる、遊具の整備と、適切な運動あそびを与えるためのよりどころをえたいということにあった。